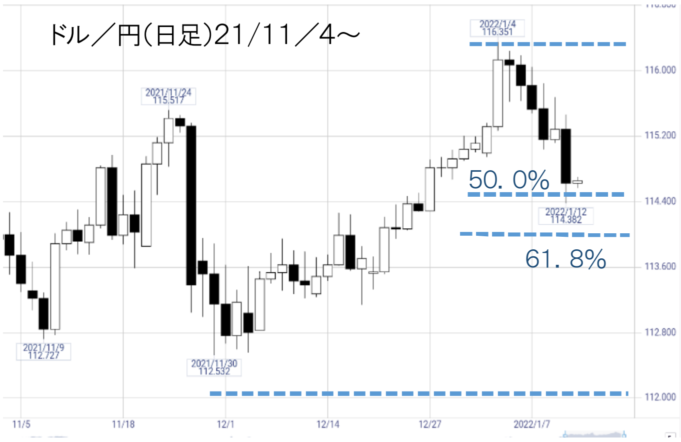
田嶋智太郎のＦＸレポート☆彡　２０２２年０１月１３日更新分

■　ドルの調整はそろそろ一巡？　米ＰＰＩの結果に対する反応を見定めたい

　足元の相場は、主に米上院銀行委員会の指名公聴会におけるパウエルＦＲＢ議長の発言と昨日発表された１２月の米消費者物価指数（ＣＰＩ）の結果にやや強めに反応している。
　既知のとおり、パウエル議長は「インフレを元に戻すために金融当局のツールを活用する」と述べるなど、タカ派寄りの基本姿勢を崩すことはなかったが、市場の受け止めは「そこまでタカ派な印象ではなかった」ということのようである。
　市場は、とくに利上げや量的引き締めについて議長が「年後半もしくは年央からのスタート」を示唆した点に着目したようである。つまり、３月利上げの線はやや薄らいだということになるのだろうが、正味のところは誰にもわかりやしない。実際には、市場の期待が先走りし過ぎていたところで目耳に飛び込んできたパウエル氏の発言は、少々“拍子抜け”なものに映ったということなのであろう。結果、ドル／円は伸び悩んで、ユーロ／ドルは強含みの展開となった。
　加えて、昨日発表された１２月の米ＣＰＩの結果が市場のドル売りを加速させることになった点も見逃せない。ＣＰＩの結果自体は、前年比で３９年ぶりの大きな伸びを示したわけだが、事前の市場予想と一致していたことから「事実で（ドル）売り」のような反応が見られた。
　発表後に生じたやや苛烈なドル売りの反応を見ると、市場は一段の伸びに期待していたようでもある。ならば、事前予想にそこまで盛り込めばよかったとも思うのだが、そこが市場の面白いところでもある。陰で勝手に期待を膨らませて、勝手に失望したということになろうか。

　とまれ、昨日のドル／円は一時１１４．３８円まで下押す動きとなり、先週５日以降の調整が継続している（前回更新分の本欄で「ドル／円は上げ一服」と予想している）。１１４円台前半の水準は、昨年１１月３０日安値から今年１月４日高値までの上昇に対する「半値押し」の水準であり、ひとまず目先の調整は一巡ということになる可能性が高いと見る。仮に、もう一段の下値を試す動きが出たとしても、それは６１．８％押しの１１４円割れの水準あたりまでということになるだろう（左図参照）。



　差し当たっては、本日（１３日）発表される１２月の米卸売物価指数（ＰＰＩ）の結果を確認したうえで押し目を拾うかどうかの判断につなげたい。前回（１１月）は前年同月比＋９．６％と驚くような高い伸びとなり、今回の市場予想平均も同＋９．８％とされている。実際の結果が「予想と一致」あるいは「若干弱め」であったなら、昨日と同様にもう一回ドルが売り込まれる可能性もないではないだろう。もちろん、仮にドル／円が一段の下げを見れば、そこはすかさず買い拾いたいと個人的には考える。

　一方、ユーロ／ドルは昨日のドル売りで一目均衡表の日足「雲」上限水準まで上値を伸ばす動きとなっている。同水準は、昨年１０月２８日高値から１１月２４日安値までの下げに対する「半値戻し」にもあたり、ここは一旦上値が押さえられやすいと見られる。
　やはり、本日発表される１２月の米ＰＰＩの結果が気になるところであり、その結果に対する反応を見定めたうえで、基本的には戻り売りを仕掛ける算段で臨みたい。下げに転じた場合は、まず１．１３８０ドル処が目安になると思われる。　（０１月１３日 １０：００）